

H29地域協働研究（ステージⅠ）

H29-Ⅰ-09「重茂半島の海と陸を経由するエコツアー・コースの開発」

課題提案者：野崎産業

研究代表者：総合政策学部 平塚 明

研究チーム員：野崎拓司（野崎産業）、管信利（AEA）

<要 旨>

宮古市重茂半島をフィールドとして、エコツアーリストが利用できる海・陸のモデルコースを設定するために、予備的調査を行なった。海路については、湾内の白浜を経て半島突端の閉伊崎を回り、太平洋側の鵜磯、鮭ヶ崎に至るコースの地質・地形・景観資源について調査した。この海路と、環境省の「みちのく潮風ルート」に一部重なる陸路との接続を図り、人の流れを促進する。

1 研究の概要（背景・目的等）

共同研究者の一人（野崎）は重茂半島の鵜磯浜や月山山頂を含む土地250haを所有している。東北地方太平洋沖地震の津波に襲われた野崎家や小学校があった敷地の周辺は、震災後に環境省が作成した重要自然マップに、海側の「断崖地と藻場のつながり」および陸側の「残存樹林地のまとまり」がある場所として明記されている。この土地の自然環境資源を活かして、鵜磯や重茂半島への観光客の流れを作るきっかけを求め、研究を始めた。既に、当地をフィールドとした平成28年度地域協働研究「宮古市重茂半島における自然保護ファシリテーター（重茂レンジャー）の養成」により、地元住民から二人の重茂レンジャーを産み出している。

一方、環境省は復興プロジェクトの一つとして「みちのく潮風トレイル」の設置を進めている。しかし、八戸から延伸してきたトレイルは浄土ヶ浜でとどまっておらず、すでに設置が済んでいる釜石以南との間は途切れたままである。潮風トレイルは月山や鵜磯地区を通るが、この区間にはトレイル利用者の拠点となる場所が不足している。また、三陸各地の津波浸水域では居住を制限し、公園化している所がいくつもあるが、自然との共生を謳いながら実際は都市公園と変わらない造園や園芸種の植栽に終始している例が多い。

次の二つの課題に取り組み、この地域の自然を重視した活性化を支援する。

課題a：外部から重茂半島への、自然志向の観光客（エコツアーリスト）の流入を増やすために、海・陸のモデルコースを開発する。

課題b：エコツアーリストの満足度を高めるために、地域環境資源を発掘し、重茂レンジャーを増やししながら、その活動拠点としての鵜磯地域の環境を整える。

2 研究の内容（方法・経過等）

課題aについて。エコツアーリストが移動し滞留する海・陸のモデルコースを設定するために、予備的調査を行なう。とくに舟運について実地に検討する。船による宮古港-鵜磯浜・宿浜への移動、あるいは鵜磯浜・宿浜を起点

とした周辺への移動コースを、実際に航行する。その際、所要時間、海底地形、気象条件等の要因について検討する。立ち寄れる港・浜の設備をチェックし、そこからみちのく潮風トレイルなどの陸路への接続・連係を試みる。

課題bについて。重茂半島の自然環境資源の調査、掘り起こしを行なう。海路から観察できる自然環境資源（とくに地形・地質・景観）について記録する。船から確認した資源について陸側からも確認する。また、鵜磯の森林内の自然観察路やビオトープを整備する。ビオトープの中心には、津波による攪乱によって埋土種子から甦り、自然界の復興の象徴として最も相応しい絶滅危惧植物ミズアオイを据え、他との差別化を図る。

3 これまで得られた研究の成果

「陸の道」については、重茂レンジャーのワークショップを2017年6月10日（野鳥）、6月24日（地形・地質）、7月1日（昆虫）、7月17日（植物）に実施した。（9月3日の最終回は台風のため中止した。）

「海の道」については7月18日、8月28日の二回、船で重茂半島沿岸を周回し、主に景観について調査した。外海を通るので、安定して航行できる1.5トンの遊漁船をチャーターした。第1回は、リアスハーバー宮古から出港し、重茂半島を大きく回り込みながら、本州最東端である鮭ヶ崎沖まで船を進めた。第2回は、各港のアクセスを考慮し、なるべく陸地から近いところを航行し、ドローンも利用して、海からの近景を重視した調査を行った。いずれの回も、各港への着岸の可能性を確かめながら実施した。

結果の一部を「図 重茂半島の地質・地形・景観資源」に示す。重茂半島は、主に花崗閃緑岩とデイサイト・流紋岩類の地質で構成されている。図中①の白浜漁港は花崗閃緑岩の地質帯に位置し、周辺に花崗岩類の露頭やマサ土化した白砂の浜が広がっている。一方、②～⑤はデイサイト・流紋岩類の地質帯に位置し、風波の影響で浸食を受けた海蝕崖や洞門などが奇観を呈している。各所の露頭は同様の地質帯に属する浄土ヶ浜と外観が類似している。宮古港の築地と①白浜との間の海路は、かつて

宮古の本校に重茂の分校から通う子どもたちを乗せて行き来した定期巡航船の航路と重なる。また、②閉伊崎からの海路も昔、黒崎神社から船に載せた神輿が各港を巡った海路の再現にあたる。

重茂半島は三陸北部に広がる海成段丘の南端部に位置しているとも言える。洋上からは部分的ながら北山崎に似た断崖と段丘面からなる光景が眺められる。地形区分では、海成段丘を含む「九戸丘陵台地」と複雑な海岸線が入り組む「リアス海岸低地・段丘群」の境目にあたり、地質図では「北部北上帯」と「南部北上帯」の境界に位置する。したがって場所によって、海成段丘あるいはリアス海岸それぞれの特徴を持った地形を観察できる。つまり、人の歴史と、それに重なる地質学的な景観の多様性を体感できる希有な地域である。

重茂レンジャーの活動拠点となる鵜磯ビオトープでは、津波からの復興を象徴する植物ミズアオイを保護し、繁殖にも成功している。ミズアオイは美しい花をもった絶滅危惧植物であり、ほとんどの人は目にすることがない種類だが、津波によって数十年以上前の埋土種子から一時的に復活し、三陸一帯の被災者を驚かせた。しかし、復旧工事等のために再び絶滅の危機に瀕しており、その避難場所として鵜磯ビオトープを設置した。震災からの復活を象徴する植物であり、これをビオトープの中心に

据えることにより、真に自然との共生を表現した震災復興祈念公園として、エコツアーリストからの評価を高められる。なお、台風などの影響で個体数が減少したので、8月29日に補植を行った。

4 今後の具体的な展開

重茂半島における環境省「みちのく潮風トレイル」の開通（2019年3月頃）を契機として、「持続可能な観光」を目的とするエコ・ツアーコースの具体化を二年計画で進める。

1年目は体験ツアー「山の道」「海の道」を実施する。「山の道」では、自然活動をしている市民、観光業従事者、県内在住外国人などが参加する陸路のモニタリングツアーを実施し、意見を募る。「海の道」では三陸鉄道など地域企業とともに、宮古市から山田町への船を利用したツアーを行う。

2年目は、モニタリング結果をもとに、地元住民が活動の中心となる。鵜磯小学校跡地に仮設トイレなどを設置し、キャンプサイトとしてトレイル利用者を受け容れる。重茂レンジャーがツアーのガイドを担当する。

5 その他（参考文献・謝辞等）

平塚明（2017）ミズアオイと生態環境史。岩手植物の会会報No.54, pp.1-8.

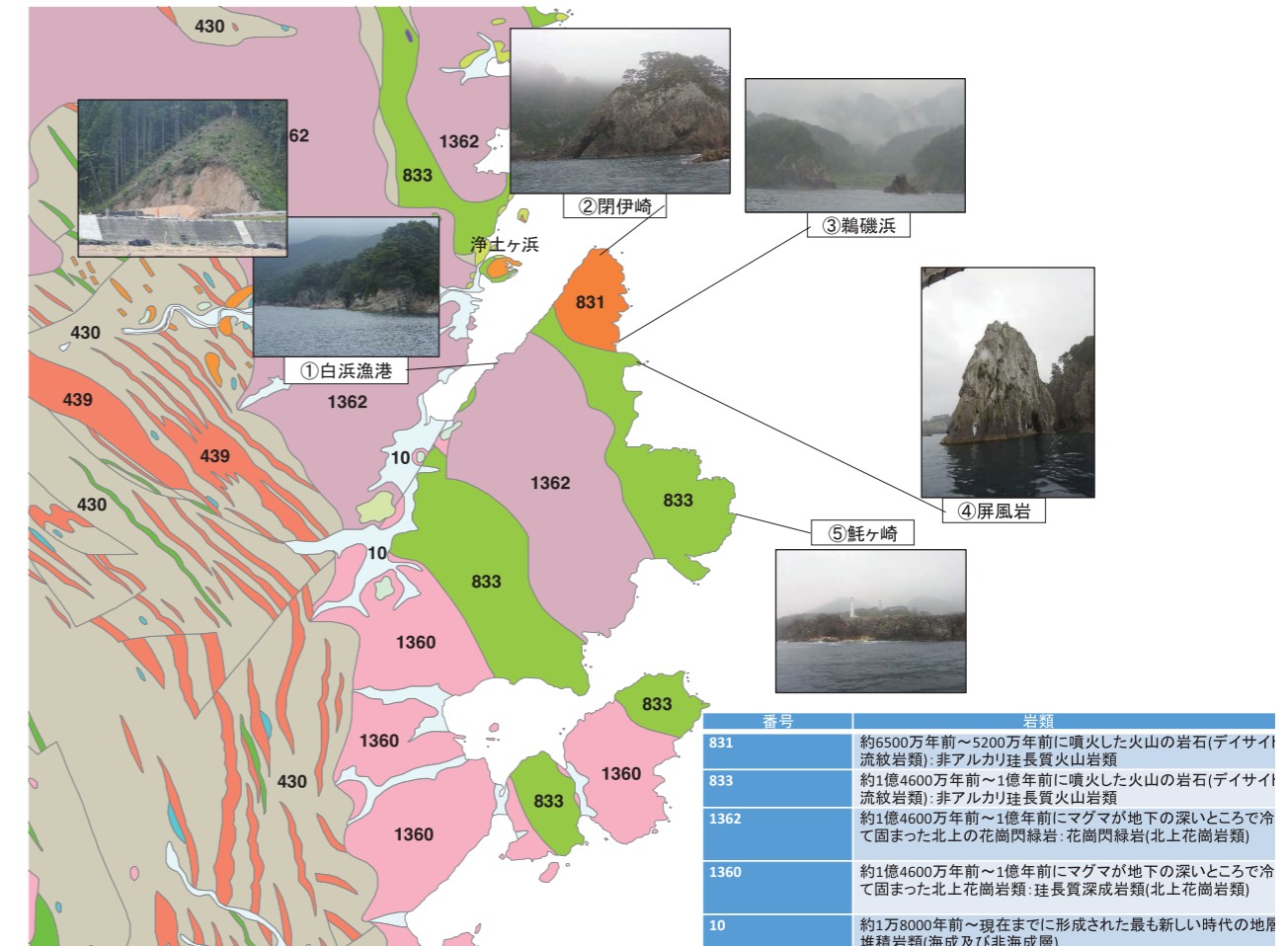


図 重茂半島の地質・地形・景観資源（産総研地質調査総合センター 20万分の1日本シームレス地質図を一部改変）